稔りの秋、獲れたての新そばを満喫
～ひがしどおり新そば街道まつり～

１０月１１日から１３日にかけ、村内７地区（向野、蒲野沢、砂子又、大利、小田野沢、鹿橋、目名）で、大人気の「ひがしどおり新そば街道まつり」が開催されました。

稲刈り作業や色づき始めた紅葉など、秋を感じる景色の中、今年もたくさんの方が街道を巡り、東通村の十割そばを食べ比べました。

特に連休中日の１２日はどの地区も大繁盛で、会場の外にまで行列が並ぶことも。待ち時間の間も、自分好みの地区の味を語ったり、街道めぐりの順番を話し合うなど、そばの話題で持ち切りの様子。そして、いざ運ばれてくると、味の違いや食感の違いに話が弾み、笑顔と箸が止まらないようでした。

また、今回のそば街道まつりでは、昨年来、東通村と東通★東風塾が共同で開発している、村特産のブルーベリーを贅沢に使ったゼリーと清涼感溢れる水ようかんがテスト販売されました（大利会場のみ）。このコーナーも連日大好評に終わり、今後、いただいたアンケート結果等を基に具体的な商品化について検討が行われます。

この秋収穫された新そばは、そば乾燥貯蔵施設に保管され、お正月や行事などでは挽きたてのそば粉が提供されます。

お待ちかねの一杯に箸が伸びます

大好評だったゼリーと水ようかん

今年の「サケ漁況の見通し」について学ぶ
～東通村漁業連合研究会「研修会」を開催～

１０月２日（木）、村漁業連合研究会（会長：川端昭也）が「サケ漁況の見通し」についての研修会を開催し、地方独立行政法人 青森県産業技術センター 内水面研究所 主任研究員 相坂 幸二 氏 より講演をしていただきました。

サケの回帰予測は、過去の河川回帰尾数、沿岸回帰尾数と年齢構成、海況予報等から予測されますが、今年の太平洋海域での河川回帰尾数は７６万尾（昨年：１１２万尾）、沿岸回帰尾数は８８万尾（昨年：８０万尾）の見込みのため、サケ漁の見通しは「河川回帰尾数は減少するが、沿岸回帰数は昨年よりは良い」と予測されるとのことでした。

当村のサケの水揚量は、平成２年から９年までは４，０００トンから５，０００トンと県内でも有数の水揚げを誇っていましたが、平成１０年以降は２，０００トン前後、近年では約１，０００トン前後と低調に推移していることから、会員は講師の説明に熱心に耳を傾けていました。

挨拶をする川端会長

講師 相坂主任研究員

熱心に耳を傾ける参加者の皆さん